みんなでタブレットを使ってみよう
～　児童用タブレットを身近な文房具へ　～

志布志市立田之浦小学校　講師　大野　智美

目　　次

１　研究主題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

２　研究主題の設定理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
(1)　社会の要請から
(2)　学校教育目標から
(3)　本校の実態から

３　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

４　研究の柱・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

５　研究の実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
(1)　児童用タブレットの活用法をさぐる
(2)　身近に活用するための環境づくりを行う

６　研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
(1)　令和２年度と令和３年度の職員向けのＩＣＴに関するアンケート結果
(2)　令和３年度の児童向けのＩＣＴに関するアンケート結果
(3)　成果(○)と課題(●)

〔引用・参考文献〕

・『一人１台端末の活用のための手引き』　志布志市教育委員会資料
・『ちびむすドリル』　https://happylilac.net/sy-keyboard03.html

１　研究主題

みんなでタブレットを使ってみよう
～　児童用タブレットを身近な文房具へ　～

２　研究主題の設定理由

(1)　社会の要請から

今日の社会は人工知能などＩＴ技術・情報技術の急速な進歩が見られ，大きな変革期となっている。文部科学省によると，Society 5.0 においては，ＡＩ等の先端技術が，教育や学びの在り方に変革をもたらすことが考えられるとされている。

特に，日常生活の様々な場面でＩＣＴ（情報通信技術）を用いることが当たり前となり，情報社会に対応していく力を備えることがますます重要となっている。また，ＧＩＧＡスクール構想による一人１台ずつ配備されるタブレットも，児童にとって新しい文房具の一つとなるとされている。

(2)　学校教育目標から

本校は，「心豊かでたくましい体をもち，自ら学ぶ『田之浦の子』を育成する」を学校教育目標としている。児童自身がタブレットを活用し学ぶことで，「自分の必要な情報を集める手段」「自分の考えをまとめる手段」「自分の考えを伝える手段」を身に付け，これまでよりも学習の幅が広がるのではないかと考えられる。

(3)　本校の実態から

本校児童は，素直で明るく，友達と一緒に学ぶことを喜びとしている。全校児童 20 人が複式学級で学習している。本校では，大型テレビや実物投影機が，各学年に１台ずつあり，複式学級の教室にはそれぞれ２台ずつ常設している。タブレット端末は，平成 28 年度に志布志市のモデル校として児童一人１台となるように整備された。

本校の職員もタブレットを積極的に操作する姿が見られる。児童と職員ともに教師用タブレットを使い，自分たちの考えを大型提示装置に映し出して発表したり，プリンタで印刷したりすることができる。

右のグラフは，教師用タブレットと児童用タブレットの活用について，令和２年度の２月に実施したアンケート結果である。教師用のタブレットの活用は様々な教科で活用されていることが分かる。しかし，一人１台ずつ整備されている児童用タブレットの活用については，まだまだ改善の余地があることが分かった。

また，令和３年度には，３年生以上に新しいタブレットが整備され，新たなソフト（Microsoft365，ロイロノート）も導入されることが分かり，どのような機能があ

令和2年度ICT活用についてのアンケート

ICTを教師が活用している教科（主に教師用パソコン，書画カメラなど）

教科	毎回使っている	時々使っている	あまり使っていない
国語(書写含)	1	1	1
社会	1	1	
算数	3		
理科	1	1	
生活		1	
外国語	2	1	
音楽		2	1
図工		1	2
体育		2	1
家庭			1
道徳	2	1	
総合的な学習		2	

ICTを児童が活用している教科（主に児童用タブレット）

教科	毎回使っている	時々使っている	あまり使っていない
国語(書写含)		2	1
社会		1	1
算数		2	1
理科		1	1
生活		1	
外国語			3
音楽			3
図工			3
体育			3
家庭			1
道徳			3
総合的な学習	1	1	

り，授業でどのように活用できるのか知りたいという職員からの声もあり，今年度は情報担当の係として，児童用タブレットが身近のものと感じられるような情報発信をしていく必要があると考えた。

３　研究の仮説

教師がタブレットを身近であると感じれば，児童に児童用タブレットを活用させる機会が増えるのではないか。

４　研究の柱

研究の柱として，次の２つを立てることにした。

(1)　児童用タブレットの活用法をさぐる
　ア　ＩＣＴ年間計画
　イ　ＩＣＴ研修（知る→使ってみる→情報交換をする）
　ウ　授業での活用
　エ　委員会活動での活用

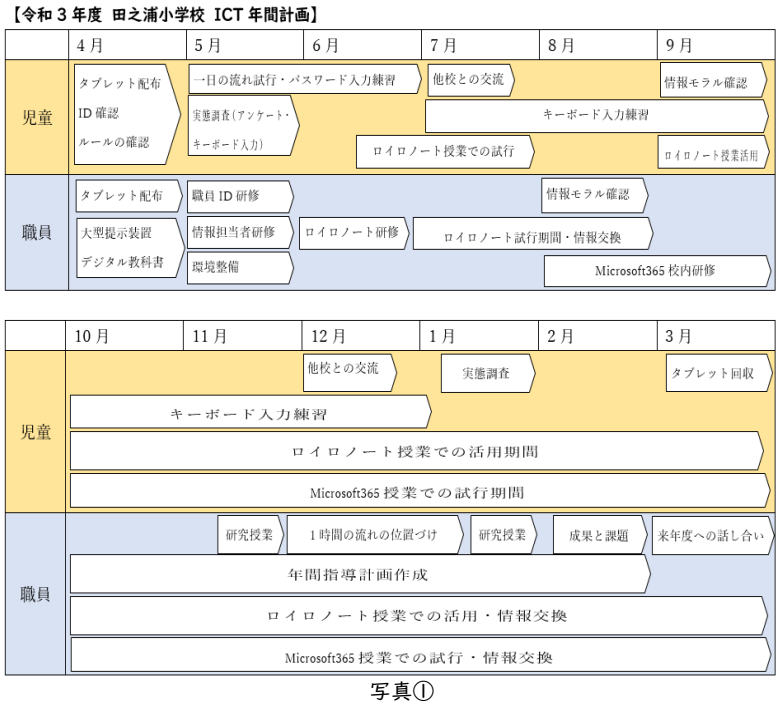
(2)　身近に活用するための環境づくりを行う
　ア　教室の環境整備
　イ　タブレットを活用するときのきまり
　ウ　児童への一斉指導
　エ　他校との交流学習

５　研究の実際

(1)　児童用タブレットの活用法をさぐる

ア　ＩＣＴ年間計画

令和３年度３月に志布志市教育委員会より「一人１台端末の活用のための手引き」が配布され，本市における段階的なタブレットの活用イメージ，本年度のロードマップ，遵守事項等が掲載されていた。それを基に本校におけるＩＣＴ年間計画を写真①のように作成した。各月の達成イメージがあると担当者として何をいつまでに提案しなければならないのか明確になり，進み具合を客観的に確認することもできた。

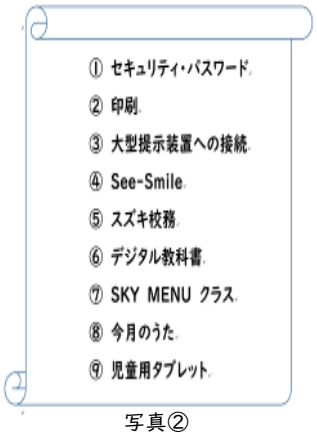


写真①

イ　ＩＣＴ研修

複式小規模校である本校では，授業を行う上でＩＣＴはなくてはならないものである。異動に伴い本市で初めて勤務する職員もいたので，４月２日には第１回ＩＣＴ研修を行った。

この研修は，児童用タブレットの活用というよりも，業務を行う上で知っておいた方がよい内容を中心に行った（写真②）。ＩＣＴ機器は使い慣れている者にとっては，便利な道具であるが初めて使う先生方にとっては不安なことも多い。小まめに声を掛け，安心して活用していただけるように注意した。



写真②

第２回以降のＩＣＴ研修については，ロイロノートの活用を中心に，右図のように「知る」→「使う」→「情報交換をする」→「知る」・・・のサイクルで進めることにより，お互いに身近な物として感じることができるのではないかと考えた。担当者である私自身も初めてだったので，まずは，触ってみることから始めようと考え，もう一つの担当である職員研修の資料をロイロノートで提示することにした。使ってみると，簡単に資料を提示したり配布したりすることができた。実際に自分たちで使うことで，その利便性を感じることができた。画面を共有しながら書き込みもでき，ペーパーレスにもつながった。

また，普段の研修の最後にショート研修としてロイロノートの活用についての情報交換の時間を設け，授業での活用法を紹介してもらった。最初は，「こんなことくらいしかしていないんですけど･･･」と自信なさげだったが，他の人にとっては「そんな使い方もできるんだね」「なるほど」と感じることも多く，有意義な時間となった。人によって使いやすいと感じる視点が異なり，毎回新たな発見をすることができた。

ウ　授業での活用

各教科で以下のような活用法ができるのではないかと考えた。

	個別学習	協働学習
国　語	作文・挿絵並べ・音読練習・自分の考えのまとめ・漢字	音読・作文・話し合い
社　会	ノート作成・調べ学習・ドリル学習	プレゼン発表・話し合い
算　数	ドリル学習・自分の考えをまとめる	ノート発表・話し合い
理　科	調べ学習・観察のまとめ・動画視聴・実験のまとめ	プレゼン発表・話し合い
生　活	生き物と植物の観察・作品記録	発表
音　楽	楽器練習・歌唱練習	楽器・歌唱・話し合い
図　工	作品撮影・調べ学習	作品発表
体　育	動画撮影・記録・手本の動きの確認	動画撮影・話し合い
外国語	発音練習・発音確認・タイピング・調べ学習	動画撮影
家　庭	手本の動きの確認・手順の可視化	共同制作・作品発表
道　徳	自分の考えをまとめる	話し合い
総合的な学習	調べ学習・自分の考えをまとめる	共同制作・作品発表

①　国語

主に，デジタル教科書を活用した。デジタル教科書への書き込みや音声の確認，ワークシートの活用，新出漢字の練習を行った。

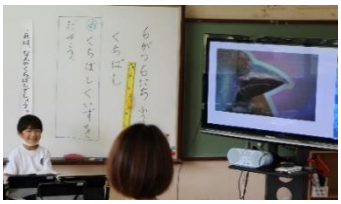
特に，新出漢字では書き順を動画で確認できるので，他の学年へ渡っているときに，１年生でも自分たちで学習することができた(写真③)。ワークシートへの書き込みを友達と見せ合い，共通点や相違点について自分たちで話し合いをすることもできた(写真④)。

写真③

写真④

１年生「じどうしゃくらべ」では自分で調べた車について，絵と文章でまとめたものを発表した。絵を大きく映し出すことで，文章で何を詳しく説明しているのか聞いている方も更に分かりやすかった(写真⑤)。「くちばし」では，授業参観で保護者に向けて「くちばしクイズ」を行った。鳥のくちばしを大きく画面に映し出しクイズにすることで子供たちも保護者も楽しく学習することができた(写真⑥)。

写真⑤


写真⑥

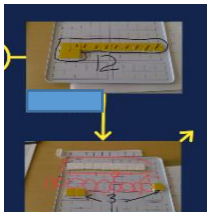
また，２年生は，１人しかいないので音読発表に苦労していたが，ロイロノートに録音する機能を使うことでぐっとその幅が広がった。会話文とナレーターを自分で役割分担したり，録音した音読に合わせて発表したりすることができた。録音はヘッドセットを使うことで自分の声に集中することもできた。写真⑦は，「お手紙」を録音し，ペープサートを使って１年生に発表している場面である。

写真⑦

② 算数

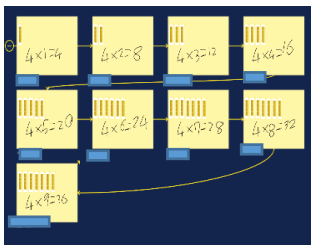
主にロイロノートを活用し，自分の考えのノートを写真で撮ったり，ブロックなどを動かして説明しながら動画で撮影したりして発表した。ノートなど写真を撮るときにはできるだけ真上から撮ることで見ている人には見やすい写真になることを指導した（写真⑧)。写真に書き込みをすることでより考え方が分かりやすく伝わることを指導した（写真⑨)。写真⑩は，百玉そろばんでの説明を友達に動画撮影してもらい発表している場面である。１年生なりにどのような方法が，自分の考えをより分かりやすく伝えられるかを考えることができた。

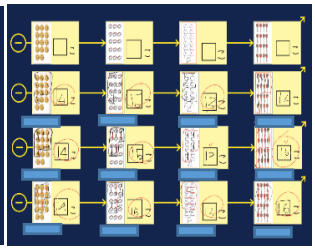
写真⑧


写真⑨

写真⑩

画像を簡単に複製できることを利用して，かけ算では考えのまとめにも活用した。同じ数ずつ増えていく様子をカード１枚ずつにまとめることができた。また，カード１枚ずつにかけ算九九を録音し，オリジナルの図付き九九カードに仕上げることもできた（写真⑪)。カードを一人一人に配布することができるので，写真⑫のように児童に送ったものを担任が「回収」→「丸付け」→「再配布」し，見届けを行った。


写真⑪


写真⑫

③ 生活

主にロイロノートを活用し，自分たちで育てた野菜の成長の写真を撮って，観察記録を行った（写真⑬)。ロイロノートの機能に慣れてくると，観察した際に感

写真⑬

じたことを忘れないようにするために，カードに音声記録を活用する児童もいた。低学年はメモをするのに時間がかかるため，音声メモの方が使いやすそうだった。様々な角度から写真を撮ったり拡大できたりするので，観察日記の絵を描くときにも役立った。

自分で作ったおもちゃの遊び方を説明するときには，動画が役に立った。２人と３人の２つのグループに分けて，おもちゃの遊び方を自分たちで動画撮影した（写真⑭）。撮影するとすぐに，「おもちゃが見えているか？」「声の大きさはよいか？」「説明は分かりやすいか？」など友達と確認する姿が見られた（写真⑮）。低学年でも分かりやすい動画を撮ることができた。また，撮影した動画も自分たちで操作しながら，友達に発表することができた（写真⑯）。

写真⑭

写真⑮

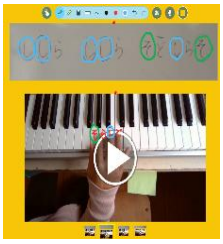
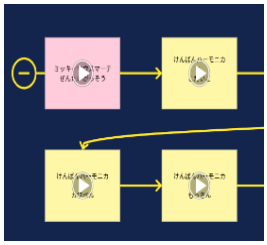
写真⑯

④　音楽

主にロイロノートを活用し，教科書の楽譜や歌詞を大型提示装置で映し出した。曲のイメージをつかむことができたり，前を向いて歌うことができたりするのでよかった。「夕やけこやけ」では，曲のイメージ画を描きどんな場面を想像したのか発表し合い，曲のイメージを深めた（写真⑰）。

また，楽器演奏では，模範演奏を前もって動画撮影しておき，個別練習ができるようにした。写真⑱の左の写真は，鍵盤ハーモニカの動画である。指がどの音の場所にあるのか書き込みも行い，分かりやすくした。写真⑱の右の写真は「ミッキーマウスマーチ」の合奏用である。メロディの鍵盤ハーモニカの音に合わせて，それぞれの楽器の演奏を重ね合わせている。再生速度を変えることもできるので，自分たちで練習できるようになった。

写真⑰

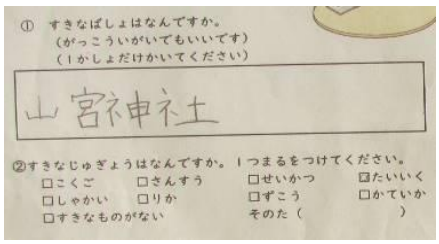


写真⑱

エ　委員会活動での活用

委員会活動の中でも児童用タブレットを活用し，自分たちで活用法を見付けていた。

①　広報委員会

広報委員会は，毎週木曜日に給食放送を行っている。その中で流すアンケートの用紙を自分たちで作成したり，録音した音声を編集したりすることができた。友達同士で教え合いながら自分たちで進めることができた（写真⑲）。



写真⑲

②　健康委員会

健康委員会は，毎月行われる健康集会で発表する内容をパワーポイントやロイロノートを使って作成することができた。自分たちで動画を撮影したり，録音したりすることができ，発表でも自分たちのパソコン操作に合わせて，劇も行うことができた（写真⑳）。

写真⑳

(2)　身近に活用するための環境づくりを行う

ア　教室の環境整備

児童用タブレットをいつでも使えるように，教室の環境整備から行った。各教室にタブレットが充電できるキャビネットを設置し，いつでも充電ができるようにした。

また，授業中いつでも使えるように，タブレット置き場を設置した。学級の実態に応じて，長机に並べたり，児童机の間にもう一つ机を置いたりして作業スペースを広げた。

写真㉑

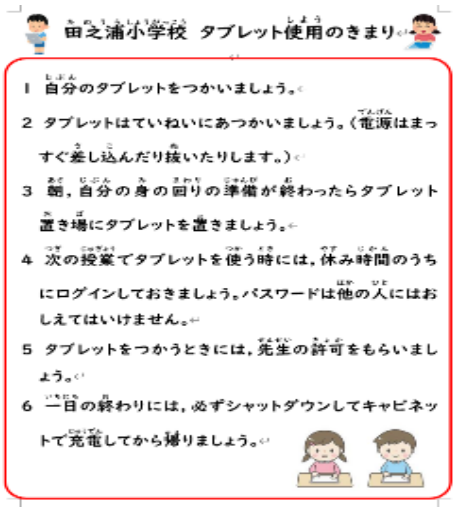
教科書やノートと一緒に並べておくには机が狭いので，隣に作業用机があるととても便利であった。また，タブレット置き場には大きく名前が書かれているので，誰がタブレットを準備していないのか一目で分かった（写真㉑）。

イ　タブレットを活用するときのきまり

児童用タブレットの活用が昨年度まであまりできていなかった反省から，今年度はまずは登校したらキャビネットから出して，下校時に片付けるという習慣を身に付けさせようと職員で確認した。簡単なことのようであるが，今までそのような習慣がなかったので，自分たちでできるようになるまでは，時間がかかった。

そして，使い始めると，「使ってよいのはいつか？」「やってはいけないことは何か？」など全校で共通理解しておかなければならないことが出てきた。

そこで，写真㉒の「田之浦小学校　タブレット使用のきまり」を作成し，全児童へ配布した。



田之浦小学校　タブレット使用のきまり

1　自分のタブレットをつかいましょう。

2　タブレットはていねいにあつかいましょう。（電源はまっすぐ差し込んだり抜いたりします。）

3　朝，自分の身の回りの準備が終わったらタブレット置き場にタブレットを置きましょう。

4　次の授業でタブレットを使う時には，休み時間のうちにログインしておきましょう。パスワードは他の人にはおしえてはいけません。

5　タブレットをつかうときには，先生の許可をもらいましょう。

6　一日の終わりには，必ずシャットダウンしてキャビネットで充電してから帰りましょう。

写真㉒

ウ　児童への一斉指導

①　タブレットの基本的な使い方の指導

児童への指導については，まず全体への一斉指導を全職員と市のＩＣＴ支援員で行った。指導した内容は，次の３点である。

- タブレットを使用するときのきまり
- タブレットの立ち上げ方
- パスワードの入力の仕方

一斉指導をすると，教師の得意不得意にかかわらず足並みをそろえ，困っている児童に全職員で対応することで効率的に指導することができた。特に，パスワードは，他の人に分かりにくくするために小文字・大文字・数字が混ざっている。そのためキーボード操作に慣れない児童たちは打ち込むのにとても苦労した。多くの職員でサポートできたので安心して対応することができた。

②　ロイロノートの基本的な使い方の指導

ロイロノートは児童だけでなく職員も初めて使用するので，戸惑いも大きかった。そこで，情報担当者が中心となり，基本的な使い方の指導も一斉指導を行った。指導したのは以下のとおりである。

- ログインの仕方
- 授業への参加の仕方
- ノートの作り方
- テキストの使い方

・　写真の撮り方
・　録音の仕方
・　手書き入力・キーボード入力の仕方
・　カードの送り方

そのときに自己紹介カードを作成した。児童は普段からタブレットやスマートフォンに慣れ親しんでいることもあり，職員よりも使い方を簡単に身に付けていった印象である。最後に全員のカードをつなげて見てみると，一つの立派な作品として仕上がっていることが分かり，大変うれしそうであった。

③　キーボー島アドベンチャーの基本的な使い方の指導

昨年度の職員アンケートの中で，児童に身に付けさせたい力として「児童のタイピング技術の向上」が挙げられていた。実際，高学年を中心とする数名を除いては，ほとんどタイピング入力をすることができなかった。そこで，朝の活動の時間にスズキ教育ソフトが開発した「キーボー島アドベンチャー」を活用して練習することにした。

児童全員のＩＤ登録を行い，一斉指導を行った。インターネット無料教材「ちびむすドリル」よりローマ字表とホームポジションの図を印刷し配布した（写真㉓）。

最初は指１本でアルファベットを探していた児童も練習を繰り返すことで，ホームポジションを意識してタイピングすることができるようになった。楽しくタイピング練習をすることができ，多くの児童が始めた級よりも５級以上進級することができた。

写真㉓

エ　交流学習

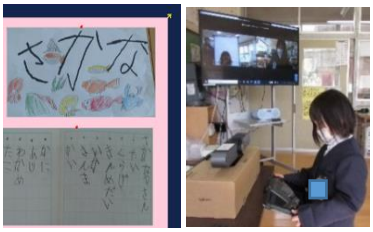
近隣の潤ケ野小学校と森山小学校とは，これまでも交流学習を行ってきた。今年度も全学年それぞれテレビ会議システムを活用して，国語や図工の発表会を行った。同じ学年の友達が少ない小規模校にとっては，自分の作品に感想を言ってもらったり友達の作品を見せてもらったりできることは大変貴重な体験である。写真㉔は，お気に入りの本を紹介し合っている場面である。

写真㉔

特に，２年生は森山小学校も本校も１人ずつということもあり，他の学年よりも多くテレビ会議での交流学習を行った。また，ロイロノートもつなぎ，国語や算数の授業を一緒に行った。実験的に担任がそれぞれ１年生と２年生と分かれて授業を行ってみた。それぞれ教師用タブレットで Teams をつないで会話ができるようにし，児童用タブレットでロイロノートへの書き込みができるようにした。ヘッドセットを使うことで音声が聞き取りやすくほとんど教師からの指示がなくても授業に参加できていた。ノートもロイロノートでやりとりができるので単式学級のように授業を行えることが分かった（写真㉕）。

写真㉕

１年生もロイロノートを使って，森山小学校の１年生と「おみせやさんごっこ」をすることができた（写真㉖）。自分のほしい品物をメニュー表から選び，互いのタブレットに送り合えるようにした。遠く離れていてもすぐに交換することができ，とてもうれしそうに学習していた。これまでよりも積極的に会話をする場面が増えた。この授業をきっかけに自分たちから「授業の感想を森山小の友達に送ってもいいですか？」と言うようになり，新しい交流学習の場につながった。



写真㉖

６　研究の成果と課題

(1)　令和２年度と令和３年度の職員向けのＩＣＴに関するアンケート結果

ア　ＩＣＴを教師が活用している教科

ICTを教師が活用している教科（主に教師用パソコン，書画カメラなど）

教科	毎回使っている	時々使っている	あまり使っていない
国語(書写含)	1	1	1
社会	1	1	
算数	3		
理科	1	1	
生活		1	
外国語	2	1	
音楽		2	1
図工		1	2
体育		2	1
家庭			1
道徳	2	1	
総合的な学習		2	

ICTを教師が活用している教科（主に教師用パソコン，書画カメラなど）

教科	毎回使っている	時々使っている	あまり使っていない
国語(書写含)	3	1	
社会	1	2	
算数	3	1	
理科	3	0	
生活		1	
外国語	2	1	
音楽		1	2
図工		2	1
体育		2	1
家庭		2	
道徳	3		0
総合的な学習		2	

ほとんどの教科で活用する機会が増えている。特に４教科では，ほぼ毎回活用している。

イ　ＩＣＴを児童が活用している教科

ICTを児童が活用している教科（主に児童用タブレット）

教科	毎回使っている	時々使っている	あまり使っていない
国語(書写含)		2	1
社会		1	1
算数		2	1
理科		1	1
生活		1	
外国語			3
音楽			3
図工			3
体育			3
家庭			1
道徳			3
総合的な学習	1	1	

ICTを児童が活用している教科（主に児童用タブレット）

教科	毎回使っている	時々使っている	あまり使っていない
国語(書写含)	1	2	1
社会	1	2	
算数	1	3	
理科		3	
生活		1	
外国語		1	2
音楽		1	2
図工		1	1
体育		1	2
家庭			1
道徳			3
総合的な学習	1	1	

令和２年度では，毎回使っている教科が総合的な学習だけだったが，国語・社会・算数でも活用する機会が増えている。時々使っていると答えている数も大きく増えている。

ウ　活用しているＩＣＴ機器

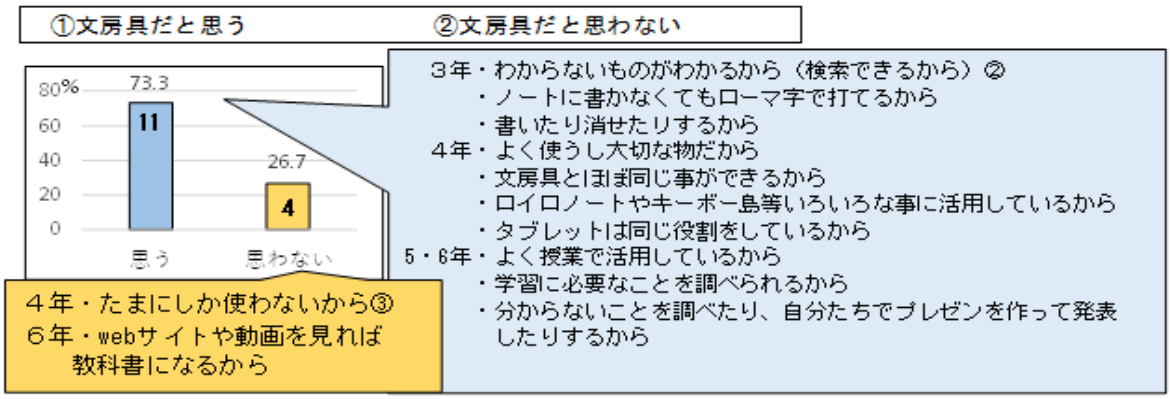
ICT機器	毎日使っている	時々使っている	あまり使っていない
教師用タブレット	3		
児童用タブレット	1	2	
大型提示装置	3		
書画カメラ		1	2
デジタルカメラ		3	
ICレコーダー			3
スキャナー		1	2

ICT機器	毎日使っている	時々使っている	あまり使っていない
教師用タブレット	4		
児童用タブレット	3	1	
大型提示装置	4		
書画カメラ		2	1
デジタルカメラ		4	
ICレコーダー		1	2
スキャナー			3

教師用タブレットと大型提示装置は，全員がいつも活用している。
児童用タブレットを毎日使っているという割合が，30%から 75%まで増えている。

(2)　令和３年度の児童向けのＩＣＴに関するアンケート結果
児童用タブレットに対する意識調査（３～６年児童 15 人　令和３年　12 月）

６　自分にとってタブレットは文房具（学習に必要な道具）だと思うか。



７割を超える児童がタブレットを文房具であると意識している。タブレットをよく使い，身近に感じている児童ほど「タブレットは文房具である」と捉えている。

(3)　成果（○）と課題（●）

○　児童用タブレットを活用しやすい環境に整えることで，他の職員にも活用してもらえるようになった。

○　初めて使うＩＣＴであっても，まずは「使ってみる」ことが大切である。使ってみると，どのような利点があり，授業で使えるのか見極めることができる。

○　初めて児童に使わせるときには一斉指導を行うことで，ＩＣＴ機器に苦手意識をもつ職員にも取り入れてもらえやすかったり，指導もしやすかったりする。

○　ＩＣＴ機器を活用することで，小規模校においてもいろいろな考えに触れる機会を設けることができる。

○　職員間で情報交換を小まめに行うことで，いろいろな活用法を知ったり考えたりすることができる。

○　タブレットを活用する機会を設けるほど，職員も児童もタブレットを身近で使いやすい道具として認識していく。

●　ＩＣＴを授業で活用することに慣れない職員も多く，まだまだ啓発活動が必要である。

●　児童の能力差への対応を担任一人で行うのは難しい。職員間での連携が必要である。

●　年度が替わると職員のメンバーも替わるため，４月からのサポートの在り方も考えていく必要がある。

●　ＩＣＴ機器を活用することでノートに書く機会が減ってきている。何をノートに書くのか，何をタブレットに残すのか話し合いが必要である。

●　児童にとってＩＣＴを身近な文房具であると感じさせるには，担任が活用する機会を設けることが大切である。

●　ＩＣＴに対して苦手意識があると，一度不具合があると敬遠してしまいがちだった。情報担当者として，いつでもサポートできる関係作りが必要となる。